2024年度一般入学試験問題

国　　語

（2月14日）

開始時刻　　午後1時00分

終了時刻　　午後2時00分

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. この冊子は18ページです。落丁、乱丁、印刷の不鮮明及び解答用紙の汚れなどがあった場合には申し出てください。
3. 解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があるので、監督員の指示に従って、それぞれ正しく記入し、マークしてください。

   ①　受験番号欄

   受験番号を記入し、さらにその下のマーク欄にマークしてください。正しくマークされていない場合は、採点できないことがあります。

   ②　氏名欄

   氏名とフリガナを記入してください。
4. 解答は解答用紙の解答欄にマークしてください。例えば、 10 と表示のある問いに対してⓒと解答する場合は、次の（例）のように解答番号10の解答欄のⓒにマークしてください。

   （例）

10	ⓐ　ⓑ　●ⓒ　ⓓ　ⓔ

5. 問題冊子の余白等は適宜利用してもかまいません。
6. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

一

次の文章を読んで、**問一**～**八**に答えなさい。

自分が発言するタイミングを調整する能力、相手がまもなく話を終えるのをサッチ(ア)する能力は、いずれも人間が会話をする上で重要なものである。この能力のおかげで、人間は会話の際、相手が話を終えてから最小限の遅延で話し始めることができる。しかし、その能力があるのと、実際に相手の言葉に素早く応答するのとは別の話だ。[A]

[V] ためには、当然、素早い応答の能力は不可欠だろう。発言時間は限られた資源だ。急いで話し始めないと他人にその資源を奪われてしまうかもしれない。だから単に他人に発言時間を奪われないために素早く応答しているのだとも考えられる。だが、実際にはそうでないことが多い。現実の会話は二人で行われることが多いからだ。二人の会話ならば、一方が何かを問いかけた時、それに答える人は一人しかいない。だから誰か別の人に発言時間を奪われる心配はない。ではなぜ、人はそれほど素早く応答しようとするのだろうか。

この問いへの答えを知る手がかりは、会話中、質問への応答に遅れた人に何が起きるかを見ると得られる。次の例を見て欲しい。

1. A：そこの料理は美味しいの？
2. （1・7秒沈黙）
3. A：あんまり美味しくない？
4. B：まあね。――そうか――そうだね。私が答えないとね。

1でAの人物は、Ｙｅｓ／Ｎｏで答えられる質問をしている。ただ、この時は、通常の平均応答時間である二〇〇ミリ秒内に返答が得られず、長い沈黙がある。Bの人物が返事をしないからだ。ここで注目すべきはAの次の行動だ。Aはまったく同じ質問を繰り返すことはしない。再び同じ内容の質問をするのだが、言い方を変える。[B]最初の質問は、中立的な言い方になっている。こういう尋ね方をする時、質問者は実はＹｅｓの答えを期待していることが多い。しかし、言い直しの質問はそれとは逆になっている。否定の言葉を含んだ、否定の答えをするのが自然に思える質問になったのだ。すると、今度は、すぐに答えが得られた。

この例では、応答の遅れが、「あなたの質問はＹｅｓの答えをユウドウ(イ)する偏ったものだと思う」と相手に伝える信号になっている。相手が特定の答えを期待しているとわかるため、それに反する返答はしにくくなったのだ。これで遅延の起きた理由は一応、説明できる。応答が遅れたことで、B

の答えはＮｏであると予測ができるので、Ａは質問を、Ｎｏの返答がしやすい言い方に直している。この質問にＢは遅れることなく応答している。

ではこの例はどうだろうか。

1. Ａ：途中でちょっとこちらに来てもらうっていうのはどうですか？
2. （沈黙）
3. Ａ：時間ないですかね？
4. Ｂ：ないですね。こっちですることがあるので。

ＡはＢに対し、車で移動中に自分のところに来て、乗せて行ってくれないか、と尋ねている。それに対し、Ｂは本来、応答するはずなのだが、沈黙が続いて応答がない。C この場合も先の例と同様のことが起きている。Ｂの沈黙は、「私はその質問に [W] と言うつもりはない」と伝える信号になっている。それを受けて、Ａは、Ｂが頼みを拒否しやすい言い方で質問し直している。すると、Ｂは遅延なしで、「時間がないのでそちらに行くことはできない」と答えている。

D この二つはいずれも、会話に「選好（preference）」というものが存在することを示す例である。選好は、ごく早い時代に人間の会話の分析を行った社会学者のハーヴェイ・サックス、アニタ・ポメランツが提唱した概念である。ここで提示した二つの例では、質問に応答しないことが、「この質問に肯定的な応答をしたくない」という信号だと解釈された。一つ目の例では、質問はＹｅｓ／Ｎｏで答えられるもので、中立的ではあるものの、Ｙｅｓの答えを予期していることが相手に伝わっていた（同じＹｅｓ／Ｎｏで答えられる質問でも「あなたは学生ですか？」などとは違っていたのだ）。二つ目の例では、質問は厳密には相手に頼みごとをするものになっており、[X] と答えて欲しいことは明らかだった。そのため [Y] とは言いづらく、代わりに沈黙することになった。

これらの二つの例では、会話に参加している人たちがどちらも社会性のあるふるまいをしていると言える。応答を遅延させた人は、相手の期待する応答はできないが、相手の意に沿わない応答をするよりは、無言でいる方が相手に与える印象は柔らかくなるだろうと思っているわけだ。また、応答してもらえず沈黙された側も、相手の意向を察して [Z] と答えやすい言い方で質問を直している。つまり、会話に参加している人がどちらも会話をエンカツ（ウ）なものにするために協力し合っているのだ。

二つの例はいずれも、二行目が沈黙になっているが、これは正確には、応答が「ない」のではなく、遅延が異常に長くなっていると考えるべきだ。

どちらの場合も、質問をした側はもっと長く応答を待ち続けることは不可能ではなかったはずだ。だが、そうはせずに再び話し始める。E 本来はBの人物が話す番であり、当のBは話をしていないのに、Aが話し始めてしまうのだ。

（ニック・エンフィールド『会話の科学 あなたはなぜ「え？」と言ってしまうのか』による。）

問一 傍線部ア～ウの漢字と同じ漢字を含むものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つずつ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、アが 1 、イが 2 、ウが 3 。

ア サッチ
- ⓐ 調査結果をサッシにまとめる
- ⓑ メンバーをサッシンする
- ⓒ 深くコウサツする
- ⓓ 工事のニュウサツを行う
- ⓔ 貸し借りをソウサイする

イ ユウドウ
- ⓐ 意見にサンドウする
- ⓑ 熱がデンドウする
- ⓒ 野球のデンドウ
- ⓓ 気がドウテンする
- ⓔ ドウリをわきまえる

ウ エンカツ
- ⓐ カイカツな性格
- ⓑ 資源がコカツする
- ⓒ 問題をホウカツ的に解決する
- ⓓ 水面をカッソウする
- ⓔ 都合によりカツアイする

問二　傍線部A「しかし、その能力があるのと、実際に相手の言葉に素早く応答するのとは別の話だ」について、「別の話」であることの理由として最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 4 。

ⓐ　話を終えてからの「最小限の遅延」の長さが人によって異なるから。
ⓑ　実際の会話の場面になると、緊張して言葉がすぐには出てこないから。
ⓒ　実際の会話の場面では、失敗しないように常によく考えてから反応するよう心がけるから。
ⓓ　素早く反応できないのは、人それぞれだから。
ⓔ　反応するだけでなく、反応しないことでも自分の意思を示そうとしているから。

問三　空欄 V に当てはまる言葉として最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 5 。

ⓐ　よりよいコミュニケーションを成り立たせる
ⓑ　相手の話に割り込む
ⓒ　相手にさらに話を続けさせる
ⓓ　相手にこれ以上話をさせないようにする
ⓔ　この話をなるべく早く切り上げる

問四　傍線部B「最初の質問は、中立的な言い方になっている」の説明として最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 6 。

ⓐ　期待した答えがなく、相手から考えを引き出そうとする質問になっている。
ⓑ　期待した答えがなく、相手の答え次第で会話をつくっていこうとするような質問になっている。
ⓒ　期待した答えはあるが、話の流れや会話の流れで柔軟に展開していけるような質問になっている。
ⓓ　期待した答えがあり、それを相手にかすかに感じさせながら会話を展開する質問になっている。
ⓔ　先が見えないので、とにかく会話をすることで何らかの考えを得ようとする質問になっている。

問五　傍線部C「この場合も先の例と同様のことが起きている」について、「同様のこと」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 7 。

ⓐ　Bの人物が沈黙している。
ⓑ　Bの人物が意図的に沈黙して、Aの人物に次の話をさせている。
ⓒ　Aの人物がBの人物の沈黙を見越して、あらかじめ考えておいた次の発言をしている。
ⓓ　Aの人物がさらにたたみかけるように重ねて質問している。
ⓔ　Aの人物がBの人物の沈黙を踏まえ、Bの人物が反応しやすい問いかけをしている。

問六　傍線部D「この二つはいずれも、会話に「選好（preference）」というものが存在することを示す例である」の「選好」の説明として最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 8 。

ⓐ　最初に話しかける側が、自分に都合がよいような展開を選ぶこと
ⓑ　最初に話しかける側が、相手に気に入られるような展開を選ぶこと
ⓒ　話しかけられた側が、自分に都合がよいような展開を選ぶこと
ⓓ　話しかけられた側が、相手に気に入られるような展開を選ぶこと
ⓔ　お互いが、自分に都合がよいような展開を選ぶこと

問七　空欄 W 、 X 、 Y 、 Z に当てはまる言葉の組み合わせとして最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 9 。

ⓐ　Wが「Yes」、Xが「No」、Yが「Yes」、Zが「No」
ⓑ　Wが「Yes」、Xが「No」、Yが「No」、Zが「Yes」
ⓒ　Wが「No」、Xが「Yes」、Yが「No」、Zが「Yes」
ⓓ　Wが「Yes」、Xが「Yes」、Yが「No」、Zが「No」
ⓔ　Wが「No」、Xが「No」、Yが「Yes」、Zが「Yes」

問八　傍線部E「本来はBの人物が話す番であり、当のBは話をしていないのに、Aが話し始めてしまうのだ」について、「Aが話し始めてしまう」理由として**適切でない**ものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 10 。

ⓐ　相手からの反応を期待しておらず、話し始めてしまう。

ⓑ　期待した答えが得られなかったことを少しでもバックアップしようとして話し始めてしまう。

ⓒ　よりよいコミュニケーションを成り立たせるために話し始めてしまう。

ⓓ　相手への気遣いとして話し始めてしまう。

ⓔ　会話をしていくうえで、協力し合うことが重要であると考え、話し始めてしまう。

二　次の文章を読んで、**問一**～**八**に答えなさい。

なぜ神饌(注1)を売買するのか

海民の呪術のなかには、その意味をはかりかねる奇妙なものがあります。A

気仙沼地方では旧暦の一〇月に漁撈(注2)の神であるエビスの祭りをおこないます。川島は調査のため、漁民の尾形栄七（一九〇八―九七）の家でこの祝いに参加していました。

川島は、神棚に供えた魚を客としてもらいうけることになりましたが、すると尾形はやにわに財布をとりだし、「どれ、その魚おれが買うから」といって、家の者と「商売まがいのこと」をおこない、それから川島に魚を手渡したというのです。

尾形によれば、供えものの魚をつうじて贈る側のケガレが相手におよぶため、金銭を介することによってそのケガレをシャダン(ア)したのだといいます。

では、聖なる神饌を金銭で売買する、卑俗にもみえるこの行為が、なぜそのような呪力をもっていたのでしょうか。B

このエピソードは、網野善彦の「無縁」論をおもわせます。

網野は、人とモノの濃密な関係を断ち切り、モノが商品という無主物として不特定多数の人びとのなかに入っていくには、それを市庭（市場）にもちこみ、いったん神のものとすること、つまり無縁化することが不可欠だとのべました（網野一九七八）。C

家の者同士が魚を売買する奇妙な呪術は、本質的にはこの無縁化の手続き、つまり神への供えものを川島という共同体外部の者に与えるに際して、それを金銭による売買という商品化の場（市庭）へいったん投げこみ、人とモノの有機的な関係を断ち切るものだった、とみられるのです。

X　漁民と売買をめぐるエピソードはほかにもあります。

船を住まいとし、移動を繰り返した家船漁民は、自分たちの捕った魚などが金銭で買われることを好まず、陸上の知人に贈りものとして与えました。そして、その返礼として祭事に招待してくれることをよしとし、そのような関係を「親戚」と呼んでいたというのです。捕った魚貝などを交換する得意先の農家は「いとこ」ともよばれていました（木島一九九二）。この交換の場には「暖かい応待」がともなったといいます（桜田一九四九）。

商品化の呪術を操る漁民と、商品化を忌避する漁民――二つのエピソードは相反するようにみえますが、実はそうではありません。そこには贈与に

よって成立する内部と、商品化によってシャダンされる外部という、海民の共同体の意識が示されているのです。

贈与と商品といえば、和人とさかんに交易をおこなっていたアイヌは、D銭を手に入れてもそれを決済手段とすることはありませんでした。銭は、アイヌ女性の宝であったタマサイ（首飾り）やタバコ入れの装飾部品としてもちいられました。

そのため江戸時代の和人は、アイヌが貨幣によって交換レートの公平性を確保し、富を貨幣のかたちで蓄えることを知らない未開人であると認識していました。しかしこれは和人のイヘンケンにすぎません。

アイヌの交易は、たんなる商売というわけではありませんでした。それは海民と同様、なじみの和人商人への土産と返礼、つまり贈与の形式でおこなわれました。取引をおこなう和人商人は「親戚」や「いとこ」、つまりE擬制的な身内だったのです。

贈与を重んじるアイヌにとって、銭はたんなる穴のあいた円い金属以上のものではありませんでした。そもそも、かれらが銭を貨幣として受容することは、贈りものがゆきかうことによって成立するみずからの社会を、根底から否定することにほかなりません。

もちろん、アイヌの産物を入手して本州で売買し、それによって利益をあげていた和人商人にとっても、アイヌが本州産品の決済に貨幣をもちいる事態は、当然避けなければなりません。この両者の思惑のうえで、贈与の形式での交易が存続していたのです。

無縁化の装置

アイヌは、獣皮など莫大な量の産物を交易していました。

たとえば江戸時代末から明治時代はじめにかけて、人口三〇〇人ほどであった上川（かみかわ）アイヌの場合、年間にキツネ皮七〇〇～八〇〇枚、イタチ皮一〇〇〇枚、カワウソ皮二〇〇枚、クマ皮一五〇～一六〇枚、サケ八万四〇〇〇～九万尾などを出荷し、その対価として和人商人から酒、コメ、麹（こうじ）、木綿布、糸、針、シャツ、手ぬぐい、はさみ、タバコ、煙管（きせる）、小刀、漆器、鉄砲、火薬などの本州産品を入手していました。

これだけの産物をやりとりする以上、贈与の形式がしょせん空虚なみせかけにすぎないこと、つまり商品交換そのものであることは、アイヌ自身がいちばんよく理解していたはずです。しかしアイヌにとって、獣やサケは決して商品であってはならないものでした。

獣やサケは、たんなるモノではなく［Y］です。獣やサケという仮の姿で人間の世界へやってきた神は、アイヌに捕獲されてその仮装から解き放たれ、たくさんの手土産とともに手厚く神の世界へ送りかえされます。それが神にとっての名誉であり、喜びです。

（瀬川拓郎『縄文の思想』による。設問の関係上、本文を改めたところがある。）

（注）　1　神饌――神前に供える酒食。
　　2　漁撈――漁をすること。

問一　傍線部ア、イの漢字と同じ漢字を含むものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つずつ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、アが 11 、イが 12 。

ア　シャダン
- ⓐ 空欄にシャ線を書く
- ⓑ 矢のシャテイ距離
- ⓒ シャレイを渡す
- ⓓ シャコウカーテンを買う
- ⓔ 具体的特徴をシャショウする

イ　ヘンケン
- ⓐ 四国のおヘンロさん
- ⓑ 辞書のヘンシュウ
- ⓒ ヘンクツな社長
- ⓓ ヘンキョウの地に赴く
- ⓔ なんのヘンテツもない壺（つぼ）

問二　傍線部A「奇妙なもの」とは、どんなものか。最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 13 。

- ⓐ 神棚に供えた魚を客に贈ること
- ⓑ 神棚に供えた魚を客に売ってから代金を返すこと
- ⓒ 神棚に供えた魚を主が買ってから客に贈ること
- ⓓ 神棚に供えた魚を主が食べること
- ⓔ 神棚に供えた魚を客に食べさせること

問三　傍線部B「なぜそのような呪力をもっていたのでしょうか」とあるが、呪力をもっていた理由として最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 14 。

ⓐ　金銭によってモノに新しい価値が与えられたから。
ⓑ　金銭によってモノが人間のものではなく神のものに変えられたから。
ⓒ　金属製の硬貨によって人とモノの関係が断ち切られたから。
ⓓ　金属製の硬貨がケガレをはらう魔除けの役割を果たすから。
ⓔ　モノに値をつけることによってモノの価値を見えるかたちにしたから。

問四　傍線部C「人とモノの濃密な関係」とは、具体的にどのような関係か。最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 15 。

ⓐ　商品としてのモノが人々に富をもたらす関係
ⓑ　人が自由にモノを商品化することのできる関係
ⓒ　モノの売買が、人々に交易を可能とする関係
ⓓ　人とモノが互いに独立し、干渉し合わない関係
ⓔ　モノが特定の個人の所有物であるという関係

問五　空欄 X に入る小見出しとして最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 16 。

ⓐ　海民の呪術
ⓑ　公平な交易
ⓒ　金銭の贈与
ⓓ　海民と和人
ⓔ　贈与への執着

問六　傍線部D「銭を手に入れてもそれを決済手段とすることはありませんでした」とあるが、それはなぜか。最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 17 。

ⓐ　アイヌにとって、銭は、和人から贈られた穴のあいた円い金属以上のものではなかったから。
ⓑ　アイヌは、蓄財や銭によってモノを得る貨幣経済の方法を知らない未開人だったから。
ⓒ　アイヌにとっては、穴のあいた円い金属装飾部品として銭を用いることが大切な宝だったから。
ⓓ　アイヌの産物の値段が高くならないように、和人がアイヌに銭の価値を教えなかったから。
ⓔ　アイヌの交易は、生きて行くうえで必要最低限のものを得るためだけのもので、銭は必要なかったから。

問七　傍線部E「擬制的な身内」とはどのような関係か。最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 18 。

ⓐ　血のつながりを何よりも優先させる関係
ⓑ　同一の共同体で生活するものを身内とみなす関係
ⓒ　外部からやってきて内部のものと家族になる関係
ⓓ　血はつながっていないが社会的に身内とみなされる関係
ⓔ　自分のことを二の次にして相手を優先する利他的な関係

問八　空欄 Y に入る言葉として最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 19 。

ⓐ　神の拠りどころ
ⓑ　神からの贈り物
ⓒ　神への贈り物
ⓓ　神の化身
ⓔ　神の代替品

メ　　モ

試験問題は次に続く。

三　次の文章は、芥川龍之介の小説「戯作三昧」の一節である。主人公は『南総里見八犬伝』などの著作で知られる、江戸末期の戯作者「滝沢（曲亭）馬琴」である。本文は、「神田同朋町の銭湯松の湯」が舞台となっており、人々でにぎわう銭湯の様子を描写した作品冒頭部につづく場面である。これを読んで、**問一**～**六**に答えなさい。

老人はていねいに上半身の垢を落してしまうと、(注1)止め桶の湯も浴びずに、今度は下半身を洗いはじめた。が、黒い垢すりの(注2)甲斐絹が何度となく上をこすっても、脂気の抜けた、小皺の多い皮膚からは、垢というほどの垢も出て来ない。それがふと秋らしい寂しい気を起させたのであろう。老人は*片方の足を洗ったばかりで、急に力がぬけたように手拭の手を止めてしまった。そうして、濁った止め桶の湯に、鮮かに映っている窓の外の空へ眼を落した。そこにはまた赤い柿の実が、瓦屋根の一角を下に見ながら、疎らに透いた枝を綴っている。

老人の心には、この時「死」の影がさしたのである。が、その「死」は、かつて彼を脅かしたそれのように、W　何物をも蔵していない。いわばこの桶の中の空のように、静かながらシタ（ア）わしい、安らかな寂滅の意識であった。一切の塵労を脱して、その「死」の中に眠ることが出来たならば――無心の子供のように夢もなく眠ることが出来たならば、どんなにX　ことであろう。自分は生活に疲れているばかりではない。何十年来、絶え間ない創作の苦しみにも、疲れている。……

老人は憮然として、眼をあげた。あたりではやはり賑かな談笑の声につれて、大ぜいの裸の人間が、目まぐるしく湯気の中に動いている。〔中略〕ここにはもちろん、今彼の心に影を落した悠久なものの姿は、微塵もない。

「いや、先生、こりゃとんだところでお眼にかかりますな。どうも曲亭先生が朝湯にお出でになろうなんぞとは手前夢にも思いませんでした。」

老人は、突然こう呼びかける声に驚かされた。見ると彼の傍には、血色のいい、中背の(注3)細銀杏が、止め桶を前に控えながら、濡れ手拭を肩へかけて、元気よく笑っている。これは風呂から出て、ちょうど上がり湯を使おうとしたところらしい。

「相変らず御機嫌でケッコウ（イ）だね。」

馬琴滝沢瑣吉は、微笑しながら、やや皮肉にこう答えた。

「どういたしまして、いっこうケッコウじゃございません。ケッコウと言や、先生、八犬伝はいよいよ出でて、いよいよ奇なり、ケッコウなお出来でございますな。」

細銀杏は肩の手拭を桶の中へ入れながら、一調子張り上げて弁じ出した。

「(注4)船虫が(注5)瞽婦に身をやつして、小文吾を殺そうとする。それがいったんつかまって拷問されたあげくに、荘介に助けられる。あの段どりが実になんと

も申されません。そうしてそれがまた、荘介小文吾再会の機縁になるのでございますからな。不肖[a]じゃございますが、この近江屋平吉も、小間物屋こそいたしておりますが、読本にかけちゃひとかど通のつもりでございます。その手前でさえ、先生の八犬伝には、なんとも批の打ち(注6)ようがございません。いや全く恐れ入りました。」

A 馬琴は黙ってまた、足を洗い出した。彼はもちろん彼の著作の愛読者に対しては、昔からそれ相当な好意を持っている。しかしその好意のために、相手の人物に対する評価が、変化するなどということは少しもない。これは聡明な彼にとって、当然すぎるほど当然なことである、が、不思議なことには逆にその評価が彼の好意に影響するということもまたほとんどない。だから彼は場合によって、軽蔑と好意とを、まったく同一人に対して同時に感ずることが出来た。この近江屋平吉のごときは、まさにそういう愛読者の一人である。

「なにしろあれだけのものをお書きになるんじゃ、並大抵なお骨折りじゃございますまい。〔中略〕――いや、これはとんだ失礼を申し上げました。」

平吉はまた大きな声をあげて笑った。その声に驚かされたのであろう。側で湯を浴びていた小柄な、色の黒い、眇の小銀杏が、振り返って平吉と馬琴とを見比べると、妙な顔をして流しへ痰を吐いた。

「貴公は相変らず発句にお凝りかね。」

馬琴は巧みに話頭を転換した。がこれは何も眇の表情を気にしたわけではない。彼の視力は Y ことに（？）もうそれがはっきりとは見えないほど、衰弱していたのである。

「これはお尋ねにあずかって恐縮至極でございますな。手前のはほんの下手の横好きで今日も運座(注8)、明日も運座、と、所々方々へ臆面[b]もなくしゃしゃり出ますが、どういうものか、句の方はいっこう頭を出してくれません。時に先生は、いかがでございますな、歌とか発句とか申すものは、格別お好みになりませんか。」

「いや私は、どうもああいうものにかけると、とんと無器用でね。もっとも一時はやったこともあるが。」

「そりゃ御冗談で。」

「いや、まったく性に合わないと見えて、いまだにとんと興味*がわかないのさ。」

馬琴は、「性に合わない」という語に、ことに力を入れてこう言った。

Z

そういう芸術は、彼にとって、第二流の芸術である。

彼が「性に合わない」という語に力を入れた後ろには、こういう軽蔑が潜んでいた。が、不幸にして近江屋平吉には、全然そういう意味が通じな

かったものらしい。

「ははあ、やっぱりそういうものでございますかな。手前などの了見[c]では、先生のような大家なら、なんでも自由にお作りになれるだろうと存じておりましたが――いや、天二物を与えずとは、よく申したものでございます。」

平吉はしぼった手拭で、皮膚が赤くなるほど、ごしごし体をこすりながら、[B]やや遠慮するような調子で、こう言った。が、自尊心の強い馬琴には、彼の謙辞をそのまま語通り受け取られたということが、まず何よりも不満である。その上平吉の遠慮するような調子がいよいよまた気に入らない。そこで彼は手拭と垢すりとを流しへほうり出すと半ば身を起こしながら、苦い顔をして、こんな気焔をあげた。

「もっとも、当節の歌よみや宗匠(注9)くらいにはいくつもりだがね。」

しかし、こう言うとともに、彼は急に自分の子供らしい自尊心が恥ずかしく感ぜられた。自分はさっき平吉が、最上級の語を使って八犬伝を褒めた時にも、格別嬉しかったとは思っていない。そうしてみれば、今その反対に、自分が歌や発句を作ることの出来ない人間と見られたにしても、それを不満に思うのは、明らかに矛盾である。とっさにこういう自省を動かした彼は、あたかも内心の赤面を隠そうとするように、あわただしく止め桶の湯を肩から浴びた。

（芥川龍之介「戯作三昧」による。設問の関係上、本文を改めたところに＊を付した。）

（注）

1 止め桶――銭湯で、流しに使う楕円形の桶。

2 甲斐絹――江戸時代初期に作られた絹織物の一種。甲斐国郡内（現在の山梨県都留郡）が主な生産地だったのでこのように呼ばれる。

3 細銀杏――江戸時代の男子の髪型の一つ。細く結った銀杏頭（いちょうがしら、「ちょんまげ」と呼ぶこともある）。後出の「小銀杏」も同様に男子の髪型の一つ。

4 船虫――『南総里見八犬伝』に登場する人物。毒婦とされる悪女で、悪事の限りを尽くす。後出の「小文吾」は、八犬士の「犬田小文吾」、「荘介」は同じく八犬士の「犬川荘助（荘介との表記もある）」のこと。

5 瞽婦――三味線などを弾き、歌を歌って銭をもらって歩いた盲目の女性。

6 批の打ちよう――「批を打つ」とは、「批点を打つ（欠点を指摘して攻撃する）」こと。

7 眇――斜視。

8 運座――出席者が同じ題もしくは各人それぞれの題で俳句を作り、優れた句を互いに選ぶ会。

9 宗匠――学問、芸術にすぐれた人。

問一　傍線部ア、イと同じ漢字を含むものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つずつ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、アが 20 、イが 21 。

ア　シタわしい

ⓐ ボシュウ要項に目を通す
ⓑ お彼岸にボサンする
ⓒ 上司におセイボを送る
ⓓ シボの念を抱く
ⓔ ボキの資格を取る

イ　ケッコウ

ⓐ ネンコウ序列
ⓑ 薬のコウカが出る
ⓒ コウモクに分ける
ⓓ ゲンコウを依頼する
ⓔ コウゾウ改革に取り組む

問二　二重傍線部a～cの本文中における意味として最も適切なものを、次のⓐ～ⓔのうちから一つずつ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、aが 22 、bが 23 、cが 24 。

a　不肖

ⓐ 親不孝なこと
ⓑ おろかなこと
ⓒ 生意気なこと
ⓓ 意に沿わぬこと
ⓔ よく分からないこと

b　臆面

ⓐ 悪びれた様子
ⓑ 気後れする様子
ⓒ 腹立たしい様子
ⓓ 楽しそうな様子
ⓔ 恥ずかしい様子

c　了見

ⓐ 悪だくみ
ⓑ 誤った思い込み
ⓒ 考え
ⓓ 気ままな想像
ⓔ 腹づもり

問三　文中の空欄 W ～ Y に入る語の組み合わせとして、最も適切なものを次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 25 。

ⓐ　Wが「いまわしい」、Xが「悦ばしい」、Yが「幸福な」
ⓑ　Wが「幸福な」、Xが「悦ばしい」、Yが「残念な」
ⓒ　Wが「悦ばしい」、Xが「いまわしい」、Yが「幸福な」
ⓓ　Wが「いまわしい」、Xが「嘆かわしい」、Yが「悦ばしい」
ⓔ　Wが「寂しい」、Xが「幸福な」、Yが「いまわしい」

問四　文中の空欄 Z には、次の①～⑤の各文が入る。正しい順に並べるとすれば、どれが最も適切か。次のⓐ～ⓔのうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 26 。

①　だから如何に巧みに詠みこなしてあっても、一句一首のうちに表現されたものは、抒情（じょじょう）なり叙景なり、わずかに彼の作品の何行かを充すだけの資格しかない。
②　何故かというと、歌にしても、発句にしても、彼の全部をその中に注ぎこむためには、あまりに形式が小さすぎる。
③　彼は歌や発句が作れないとは思っていない。
④　が、彼はそういう種類の芸術には、昔から一種の軽蔑を持っていた。
⑤　だから勿論（もちろん）その方面の理解にも、乏しくないという自信がある。

ⓐ　⑤→②→①→③→④
ⓑ　②→⑤→①→④→③
ⓒ　⑤→①→②→④→③
ⓓ　③→⑤→④→②→①
ⓔ　③→②→④→⑤→①

問五　傍線部A「馬琴は黙ってまた、足を洗い出した」とあるが、馬琴がそのような行動をとったのはなぜか。その理由として最も適切なものを、次の ⓐ～ⓔ のうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 27 。

ⓐ　自分の著作には絶対の自信が有り、他人の評価など全く眼中にないから。

ⓑ　あまりにも過度の賛辞に、平吉の言葉が嫌味に感じられ、不愉快になったから。

ⓒ　平吉には軽蔑と好意とを同時に感じており、彼の言葉をどの様に受け止めたら良いか、考えあぐねていたから。

ⓓ　いつも軽々しい態度の、平吉のような浮薄な男には、自分の心情は理解できないと思ったから。

ⓔ　一人前の批評家面（づら）をした素人に、中途半端な褒め言葉を並べられても、全くうれしくもないから。

問六　傍線部B「やや遠慮するような調子で、こう言った」とあるが、平吉は何故そのような調子になったのか。その説明として最も適切なものを、次の ⓐ～ⓔ のうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、 28 。

ⓐ　馬琴が不満の表情をあらわにしたから。

ⓑ　馬琴に対して、少し言い過ぎたのではないかと反省したから。

ⓒ　馬琴ほどの作家でも、苦手なことがあるという厳しい現実に触れてしまったように思えたから。

ⓓ　調子にのってしゃべりすぎたので、間が悪くなったから。

ⓔ　馬琴に軽蔑されているように感じ、自己嫌悪に陥ったから。